41号の刊行にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Adachi, Takuro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00057293

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



41 号の刊行にあたって

足立　拓朗
（金沢大学歴史言語文化学系（人文学類考古学専門分野・特別プログラム：考古学））

今年度の金沢大学考古学紀要は、髙濱秀先生の古稀記念号として編集した。本紀要には、6 篇の論考が寄稿された。考古学研究室では髙濱先生の古稀にあたり、例年の考古学大会を古稀記念大会として実施した。以下にその概要を報告する。

2019 年 11 月 16 日（土）に第 45 回の金沢大学考古学大会（髙濱秀先生古稀記念大会）を実施した。この記念大会は金沢大学サテライトプラザ 1 階交流プラザで開催した。卒業生、在学生、教員など、20 名が参加し、5 件の研究発表が行われた（写真 1 ～ 3）。髙濱先生の専門である草原考古学あるいは青銅器研究だけでなく、史跡整備や 3D 画像技術を用いた研究など、多彩な内容となった。各発表に髙濱先生を初めとして、出席者から多くの質問やコメントが寄せられた。

まず、「あいち朝日遺跡ミュージアムの整備について」と題した発表を原田幹氏（愛知県教育委員会）が行った（写真 3）。原田氏は金沢大学で博士学位を取得しており、博士課程在学時に髙濱秀先生の指導を受けている。原田氏の発表は最近オープンした朝日遺跡ミュージアムに関するものであり、朝日遺跡の専門家である原田氏の発表は全国で史跡整備に携わる金沢大学 OB にとって貴重な示唆となった。

続いて「柳沢遺跡の弥生青銅器に向き合う ～信州中野で考古学～」と題した発表を柳生俊樹氏（中野市教育委員会）が行った。柳生氏は学部から大学院に至るまで髙濱先生の指導を受けた。髙濱先生のモンゴル調査にも参加している。柳生氏は草原考古学で学んだ経験を柳沢遺跡の調査研究に活かしていることを報告した。柳沢遺跡の成果は全国的に有名であるので、参加者一同も概要は把握していたが、多くの写真や図面による解説で遺跡の性格や重要性を再認識することができた。

次の発表者の大谷育恵氏（日本学術振興会特別研究員 PD）は、大学院博士後期課程で髙濱先生に指導を受け、博士学位を取得した研究者である。「匈奴考古学に関する近年の研究動向と新資料『ユーラシアの大草原を掘る』刊行に際して」と題した発表を行った。題名の通り、大谷氏は最新の成果を多くの画像を駆使して提示した。その成果には周辺地域の研究者から多くのコメントと質問が寄せられた。

休憩を挟んで、「北方系文化の怪獣紋」と題する発表を八木聡氏（草原考古研究会・金沢大学大学院文学研究科修了）が行った。八木氏も学部、大学院にわたって髙濱先生から指導を受けた。八木氏は大学院博士前期課程修了後も着実に研究を進めており、その成果が披露された。

最後に「顕微鏡写真と SfM/MVS による土器施文具の同定の試み」と題した発表を魚水環氏（（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）が行った。魚水氏も学部において、髙濱先生の指導を受けた研究者である。現在は本務の



写真 1　質問をする髙濱秀先生



写真 1　大会の様子

埼玉県の埋蔵文化財の研究に邁進されている。今回は画像の 3D 処理による縄文施紋の顕微鏡観察について発表を行った。考古学資料の 3D データ化は最近の文化財関係者の共通の課題の一つでもあり、参加者一同にとって良い経験となった。

大会終了後は会場近くの料亭「さか根」で懇親会が開催された（写真 4）。髙濱先生を囲んで、卒業生、在学生、そして教員も交えて、活発な情報交換が行われた。その後、近江町市場付近で二次会が開催された後、金沢大学考古学研究室としては珍しく、そのまま解散となった。いままでは翌日未明になってからの解散であったが、今回は上品に終了した。今後もこのような運営を心がけたい。

2016 年度にスタートした「特別プログラム：考古学」は、今年度 12 月にプログラム 3 期生が確定した。第 3 期のプログラム生は、フィールド文化学コースから 4 名、歴史文化学コース（日本史主履修分野、東洋史主履修分野）から 2 名の合計 6 名となった。金沢大学の考古学研究室として、彼らは第 46 期となる。ただ、この特別プログラム制度は 2019 年度入学生で終了し、2020 年度入学生から新たに「考古学・文化資源学プログラム」が新設されることになった。

足立が本学に着任してから、考古学の教育体制は、「考古学専門分野」→「特別プログラム：考古学」→「考古学・文化資源学プログラム」と変容を続けてきてた。実体としての考古学研究室の存在自体は殆ど変化がないとも言えるが、金沢大学で「十分な考古学教育」を存続させつづけるよう、努力していかなくてはならない。国際的な研究活動の一層の向上を図りながら、 北陸地方の埋蔵文化財の保存と活用の教育にも十分な力を注ぐことが肝要と考えている。研究・教育の向上を図るため、2018 年度から考古学調査士資格認定機構に加盟し、考古調査士（二級）の資格取得が本学で可能になった。また、2020 年度には日本考古学協会の秋季大会を金沢大学で開催する予定である。次号では日本考古学協会 2020 年度金沢大会の活動報告をすることになる。

本書、『金沢大学考古学紀要』は、金沢大学付属図書館学術情報リポジトリ KURA で、冊子体版と同じ内容の PDF（カラー版）を一般公開している。また、考古学研究室では Web 版の小雑誌『金大考古』も刊行している。こちらは研究室主催の考古学大会で発表された論考などを中心に編集しているが、ある程度は頁数に制限なく掲載できることが特徴である。これも KURA で無料一般公開している。ご覧いただければ幸いである。



写真 3　原田幹氏の発表



写真 4　懇親会の様子